

政

治

學

德本正
廖衣
笠
平田
寫成
共著

徳本正彦・衣笠哲生
岡本 宏・平田好成
共著

政治学

— 現代政治と日本 —

法律文化社

徳本正彦	一九五三年 九州大学法学部卒 一九五七年 九州大学教養部講師 一九六三年 九州大学教養部助教授
岡本宏	一九五三年 九州大学法学部卒 一九五六年 佐賀大学文学部講師 一九五九年 佐賀大学文学部助教授
衣笠哲生	一九五四年 九州大学法学部卒 一九六〇年 九州大学教養部非常勤講師 一九六四年 九州大学教養部講師
平田好成	一九五三年 九州大学法学部卒 一九六〇年 鹿児島大学文学部講師 一九六四年 鹿児島大学文学部助教授 一九六五年 鹿児島大学文学部助教授

1965・4・10 第一刷発行
1965・6・1 第二刷発行

政治学

辛 680

著者（代表）徳本正彦

発行者 亀井 部

発 行 所 株式会社 法 律 文 化 社

京都市北区紫野宮東町九
番 替 京 都 10617 番

中村印刷株式会社 日本紙興製本

は し が き

三年ほどまえ、おもに新制大学の教養課程における政治学の講義用テキストとして、また、もっと一般の読者の方々を対象とした政治学の入門書として、『政治学入門』（法律文化社）を刊行した。このテキストは、いくつかの大学で使用していただいており、いままでに、かなりの方々から好意にみちた御批判や御意見をうけたまわったし、私たちも過去三年間これを講義で実際に使用してみても、かなり反省し欠点も多々あることに気づいた。そこで、今度は、こうした御批判や自己反省をふまえて、おもに一般の政治に関心をもっておられる読者の方々を念頭におき、一歩前進させた形で共同著書をつくる計画を立案し、昨年と今年、数回の共同研究をかさねた結果、一応まとめあげたのが本書である。

本書は、その題名がしめしているように、日本の政治をふくめた現代政治の解明に重点がおかれている。しかし、同時にまた、いままでの政治学体系の諸著作にちかい内容と構成を考慮している。したがって、現代政治、とくに現代日本の政治の分析にかなりの力点をおいてはいるが、古代・中世・近代等の政治の考察も、現代政治をよりよく理解するために、多少はふれている。複雑な政治現象の実証的な追求は紙数の関係もあって大幅に省略し、ただ、いろんな政治現象についてはその構造的特質をうきばりにする程度にとどめ、それらをふまえて、むしろ、理論的法則を明確にすることに努力をはらったつもりである。政治学界におけるさまざまな論点についても、それらを一応私たちなりに消化したうえで、本書にとりいれたつもりである。政治学にとって不可欠の条件である科学的イデオロギー性の追求ということは、意識的につらぬいているつもりであるけれども、しかし、

まだ、けっして完全なものであるということではない。困難な現代政治の解明に一步でも二歩でもちかづく努力をとおして、今後、さらにより充実したものにしていこうと考えている。本書には、なお多くの弱点がふくまれているとおもわれるが、これらの点については、多くの方々から卒直な御批判なり御指導をたまわることを中心からお願したい。私たちも、今後ひきつづき、真摯な研究と努力を積みかさねていきたいとおもっている。本書が、激動する内外の政治を理解していくのに、少しでもお役にたてば幸いである。

執筆は、いちおう左の分担によったが、むろん、最終的な執筆責任は、執筆者全員にある。

序章と第一章.....徳本正彦

第二章.....岡本 宏

第三章.....衣笠哲生

第四章.....平田好成

本書の出版にあたって、法律文化社の亀井蒨氏や編集部その他の方々にたいへんお世話になり、いろいろと御助力をいただいた。ここに深い感謝の意を表する次第である。

一九六五年三月

執筆者 一同

目次

はしがき

序章 政治とはなにか.....一

一 社会現象とはなにか(一).....二 政治現象とはなにか(五).....三 政治現象の基本的要素(八)

第一章 階級と国家.....一〇

1 階級.....一〇

一 階級とはなにか(一〇).....二 階級の諸形態(七).....三 現代社会の階級構成(二三)

2 国家.....二六

一 国家とはなにか(二七).....二 国家権力の構造(三三).....三 現代国家の構造(三八)

3 現代日本の政治構造.....三三

一 現代日本の階級構造(四三).....二 現代日本の国家構造(四八)

第二章 現代政治の發展過程……………三

1 近代革命……………三

- 一 近代革命の条件(五)……………二
- 二 近代革命の思想(五)……………三
- 三 近代革命の展開(五)

2 立憲議會主義……………六

- 一 立憲議會主義の成立過程(六)……………二
- 二 立憲主義(六)……………三
- 三 議會主義(六)
- 四 立憲議會主義の危機(六)

3 ファシズム……………七

- 一 ファシズムの運動とイデオロギー(七)……………二
- 二 ファシズムの支配(七)……………三
- 三 ファシズム支配の経験から(七)

4 社会主義……………七

- 一 社会主義革命(七)……………二
- 二 社会主義國家(八)……………三
- 三 共產主義への移行——國家の死滅(八)

5 現代日本政治の發展過程……………八

- 一 天皇制國家の性格と發展(八)……………二
- 二 占領時代(九)……………三
- 三 サンフランシスコ講和後の日本(九)

第三章 現代の政治運動……………一〇七

1 現代の政治運動の条件……………一〇七

- 一 現代政治における大衆の地位(一〇八)……………二 自由主義的民主主義から大衆民主主義へ(一〇九)……………三 大衆民主主義と政治的無関心(一一)

2 政党と選挙……………一二四

- 一 政党とはなにか(一二五)……………二 議会政治の発達と近代政党(一二七)……………三 現代の政党政治(一二八)……………四 選挙(一二四)

3 圧力団体活動と大衆運動……………一三〇

- 一 現代の集団的政治活動の条件(一二〇)……………二 現代政治と圧力団体(一二三)……………三 現代政治と大衆運動(一二四)

4 社会主義運動……………一三六

- 一 社会主義運動の必然性とその性格(一三六)……………二 社会主義運動内部の対立・矛盾(一四〇)……………三 現代の世界革命論争(一四四)

5 現代日本の政治運動……………一三七

- 一 現代日本の政治運動の条件(一三七)……………二 現代日本の政党と選挙(一三五)……………三 現代日本の大衆運動(一三七)……………四 現代日本の社会主義運動(一四〇)

第四章 国際政治と日本……………一三

1 国際政治とはなにか……………一三

- 一 国際政治を見るにあたって(二三)……………二 国際政治の概念(二五)……………
- 三 国際政治の基本的要素(二七)……………四 国際政治の本質(二九)

2 現代国際政治の発展過程……………一七

- 一 現代国際政治の形成と発展(一七)……………二 現代国際政治の発展段階(一七)

3 国際政治の現実……………一八

- 一 戦後国際政治の特徴(一八)……………二 現代の戦争と平和(二六)……………三 現代の国際政治組織(二八)……………四 現代の民族解放運動(二九)……………五 現代の平和運動(三〇)

4 国際政治のなかの日本……………二〇

参考文献……………二五

現代政治史年表

索引……………二六

序章 政治とはなにか

われわれは、これから本書において、現代政治の諸問題を検討し日本の政治を考察していくのであるが、いきなり政治の問題に立ち入るまえに、政治現象についての一応の位置づけをしておく必要がある。そこで、政治現象とはなにかということであるが、この問題をはっきりさせておくためには、まず社会現象とはどのようなものか、ということから考えてみる必要がある。

一 社会現象とはなにか

〔1〕 社会現象の特徴　ふるくから社会現象は、自然現象とちがう特徴をもった人間現象としてあつかわれてきた。それは、自然が物質現象であるのにたいして、「精神」をもった人間の現象であるという意味で、区別されていたのである。しかし、科学の発展は、やがて人間現象一般から社会現象を区分させるようになった。

はじめに社会現象を人間現象一般から区分する基準となったのは、それが人間の集群的現象であるという点であった。たしかに社会現象は、人間の集群的現象であるという点で、他の人間現象一般とはちがっている。従来、「精神科学」とよばれていた人間学の研究方法は、人間のかかる集群的現象を客観的に把握するのではなく、人間個人の精神生活を主体的にとりあげ、それをただ論理的に意味づけようとするものにすぎなかった。しかし、社会現象を科学的に究明していくためには、それを人間の集群的現象としてとらえ、その集群的現象における法

則性を客観的にあきらかにしていかなければならないのである。

だがさらに、社会現象は人間現象であるかぎりにおいて、自然現象とちがって、それが個々の人間の意志の参加によって成立しているところに特徴がある。社会現象が、意識をもった個人の相互連関のなかになりたっているかぎり、それはやはり意識をもった人間の集群的現象としてみるべきであろう。もちろん意識ももとをただしていけば、物質の高度の発展形態である頭脳への外的存在の反映であるという点で、ひろい視野では物質の存在と一元的にとらえることができる。しかし、ここでは、人間のさまざまな意識活動が、社会現象にきわめて多種多様な複雑さをあたえていることに注意しなければならない。社会現象は、意識を媒介としてあらわれる人間の集群的現象なのである。

〔2〕社会現象の合法則性　ところで、一般に世界における諸現象は、すべて有機的に関連しあい依存しあっているところの、一つの統一ある全体をなすものである。したがって、個々の現象をきりはなしてバラバラにとらえることによって諸現象を把握することはできない。しかも、世界における諸現象は、不断に運動し、変化している。いっさいの事物は、たえず発生し、発展し、また消滅しつつある。すべての現象は内的矛盾をもっており、この内的矛盾が、諸現象の発展過程をつくりだすのである。この発展過程は、単純な量的変化としてではなく、量的変化の結果、質的变化をもたらし、社会現象の場合もこの例外ではない。だからこそ、封建社会の内的矛盾の発展は、それとは質的にことなる資本主義社会に転化するし、資本主義社会の発展は、産業資本主義段階から独占資本主義段階へとすすむのである。

では、この諸現象の本質はなにであろうか。一言にしていえば、諸現象を基本的に規定するものは物質的諸条件である。いっさいの運動は、物質からきりはなされては存在しない。物質が運動するのであって、物質に物質

以外のものから運動の力があたえられるのではない。したがって、あらゆる現象は、運動する物質のいろいろな形態であるということになる。社会現象においても、意識は物質にたいする第二次的な存在であり、物質的生活が社会発展の力であるということであって、意識が社会発展の究極の原因ではないのである。

実際に、社会現象は意識を媒介とするが、その場合、一見、自由意志にもとづいて行動しているようにみえる人間も、それを全社会的視野からとらえてみると、その社会のさまざまな物質的・歴史的・社会的諸条件によって制約されている。つまり、人間は無意識のうちに社会的・時代的諸現象に感化され、その時代の社会の一般的な思想的論理で、ものを考え、行動しているのである。かつて多くの学者たちが、社会発展の原因を人間の意識や個人の資質にみていたあいだは、社会現象の発展を合法的にとらえることはできなかった。かれらにとって、社会現象は外見的には相互にからみあった人間の、集群的な行動のあらわれであるが、それは、無数の偶然性の発現としかうつらなかつたからである。人間の意識が基礎にあるのではなく、人間の社会的存在がその意識を生み出すという観点こそ、社会現象の合法性をとらえる第一歩である。いわゆるイデオロギー論は、このような観点に立つものであった。

このような見地からするならば、偶然的な要素をふくんでいる社会の現象形態の根底に、普遍的・必然的・恒常的な非偶然的関連を見出すことは可能である。なぜなら、いっさいの社会現象の究極の原因を、人間の頭のかなかにではなく、人間生活の客観的諸条件のなかにもとめていくことになるからである。では、人間生活の客観的諸条件を規定するものはなにか。それはつまるところ、人間生活をささえている物質的諸条件にほかならない。この物質的諸条件をつらぬいている法則を把握することによって、社会現象の法則的理解がなされることになるのである。

〔3〕 社会現象における土台と上部構造

社会現象を基本的に規定するものが物質的諸条件であるというこ

とは、社会発展の究極の原因が、物質的生活のありかた、つまりその時代ならびに社会の経済的構造のなかにもとめられるということである。この意味において、「物質的生活の生産様式は、社会的・政治的・精神的な生活過程一般を制約する。人間の意識がかれらの存在を規定するのではなくて、逆に、かれらの社会的存在がかれらの意識を規定する」（マルクス『経済学批判』「序言」）ということができる。いわば、生産関係の総体としての経済的構造のありかたが、その社会の性格を基本的に決定するのである。ところで、生産関係とは、その社会における生産上の人間関係、すなわち、生産手段にたいする所有・非所有関係、それにもとづく社会集団間の生産上の地位、生産物の分配関係等を内容とする。この生産関係の総体こそ、全社会過程を根本的に規定する社会の経済的土台なのである。したがって、経済はたんなる社会現象のなかの一部なのではない。それは、社会現象全体の歴史的な決定的力である。この経済による規定性を内容として、土台という把握が可能となるのである。

さて、そこで、生産関係の総体、つまり、経済構造が社会の土台であるなら、社会の他の諸現象は、当然その土台のうえにたつ上部構造的現象であることが予想される。たしかに、あらゆる社会関係は、イデオロギー的社会関係と物質的社会関係とに二分され、一般に前者は後者に規定されるということができる。しかし、上部構造的現象の内容はきわめて複雑である。とくに人間のさまざまな意識形態と、その特定要素のいわば物化した存在形態としての制度や機構とは、その性格の相対的な相連点がとらえられる必要があるであろう。土台・上部構造という概念は、社会現象の構造を建造物にみたてたとらえたかたというべきであり、より厳密な意味では、上部構造とはすぐれて経済外的な制度や機構を指すものと解するのが妥当である。したがって、社会における経済以外の他の諸現象は、経済の規定性のうえにあらわれているという意味において上部構造的現象であるが、そこには

厳密な意味での上部構造とそれ以外のイデオロギー的諸現象があり、そのイデオロギー的諸現象もまた複雑な構成をもっているといわなくてはならない。

上部構造的現象は、つねに人間の意識や行動と不可分であるから、経済的土台によって規定されるにしても、それはけっして直接的・自動的ではない。経済が土台であるということは、社会現象を経済に還元してとらえるということを意味するのではない。経済構造は、上部構造や社会意識の諸形態が、その枠内で合法的に展開する一定の歴史的方向を究極的に規定するものにすぎない。たとえば、経済関係ではおなじ労働者階級であるからといって、そのままかれらがつねに一樣の意識形態をもつわけではないし、またおなじ独占資本主義段階であるからといって、つねにおなじ統治形態がとられるわけでもないのである。生産および再生産は、社会の究極的な決定要因ではあっても、唯一の決定要因なのではない。上部構造的現象は、巨視的にみれば土台に規定されていても、それにたいして相対的に独自性をもち、社会にたいするさまざまな決定要因として作用するのである。経済学以外の社会諸科学が独自の学問領域をもちうる理由も、ここにあるといわなくてはならない。

二 政治現象とはなにか

〔1〕 政治現象の特徴 政治現象は、上部構造的現象のなかのもっとも重要な一要素である。それは右にいう上部構造と、それにもっとも緊密に対応したイデオロギー現象からなり、上部構造的現象の全体にたいして規定性をおよぼしている。土台との関係でいうならば、その特徴は、経済的土台の規定性においてもっとも直接的であり、逆にまたその経済的土台にたいする反作用も、もっとも強力であるという点にもとめられるであろう。この意味において、政治は経済の集中的表現である。経済ぬきでの政治の考察は無意味であり、経済学の成果と

結合しえない政治学はドグマである。しかしまた他方において、政治現象の土台にたいする反作用、その相対的独自性をみれば、政治を経済のみによって語ることも間違っている。政治現象の内在的な追求がなされなければ、政治は把握されえない。政治のもつ力ということを考えれば、むしろ、政治を制するものは社会を制す、といって過言ではあるまい。ここに、政治現象を究明するための政治学の存在意義がある。

〔2〕 代表的な学説 政治現象の性格については、これまでにもいくつかの示唆にとむ学説がある。そのなかから現代の政治学説にひきつがれている有力なものは、次の三つに大別することができよう。

その第一は、ドイツの一般国家学 (Allgemeine Staatslehre) に代表される立場で、政治は国家現象である、とするところからである。この立場は、絶対主義的政治支配を反映した学説であり、ふるくからの、「政治は支配である」という根強い思考を理論化しようとしたものであるということができる。だがそれにしても、事実上、国家が政治のもっとも重要な要素であることを考えてみれば、この学説は政治現象の特徴の一端をとらえているものといえることができる。しかし、政治現象を国家現象におきかえてしまうなら、国民のあいだのさまざまな政治運動を軽視する結果となることはあきらかである。この点において、第二の英米の自由主義政治学に代表される多元的国家論 (Pluralistic Theory of the State) に批判されるところとなったのである。多元的国家論は、機能主義的な立場から、政治を国家ならびに政党その他の政治的に機能する諸集団の集団現象とみる。この立場は、議会主義的な思想状況を反映し、政治概念を国家以外の社会集団に拡大することによって、政党や圧力集団の役割を重視する積極面をもったが、同時に集団機能を重視するあまり、国家と集団との同列視、政治領域の無原則的拡大におちいり、かえって政治の本質を曖昧にする結果をひきだすにいたっている。これにたいし、第三の立場は、マルクス主義の政治学説に代表されるところの、政治は権力現象であるとするところからである。これは

社会主義を目指す実践運動のなかからうまれた理論であり、経済構造の把握を基礎とし、階級論にたつて政治の本質をとらえるのである。この学説は、国家権力の獲得・維持をめぐる階級闘争が政治の本質的内容をなすものであることをしめした点において、すぐれた見方であるといえることができる。しかし、本質論を強調するあまり、現実の政治現象の把握に、なお不十分な点がのこされている。

〔3〕 政治現象の内容 本来、政治現象の内容とされるものは、さまざまである。しかもそれは、次章以下のべているように、現代において政治の領域が拡大してくるにつれ、ますます複雑多岐なものとなつてきている。しかし、われわれはこの複雑な現象のなかに、政治の本質的内容をみいださなければならぬ。その場合、重要なことは、それなくしては政治そのものがなりたないようなものはなにか、という視点であろう。かかる視点からするとき、われわれは右の学説の検討をとおして、次のことを確認することができる。すなわち、第一に、政治現象の主体はなにかという面からみた場合、政治に不可欠なものは、国家と政治集団であるということ。第二に、それらの国家や集団の運動の本質には権力現象があるということ。このことから、われわれは政治を推進する主要なエネルギーは政治権力であり、その政治権力を組織化している実体が国家であり、その政治権力の獲得をめぐるさまざまな政治集団が対立をはらみながら運動をおこなっていると理解することができる。そこには、いろいろな対立の政治的要因が働いていることはもちろん、家族制度をはじめとするさまざまな共同体的秩序やマス・メディア、さらには政治意識に働く内的要因としての心理作用など、各種の因子が複雑に作用していることを忘れてはなるまい。それらの諸要因が働きあつて、全体として政治現象が現実展開されているのである。

三 政治現象の基本的要素

それでは、このような政治現象をなりたさせる基本的要素はなにであろうか。われわれはそれを、右にみた政治現象の本質的内容からとらえなければならぬ。

〔1〕 政治権力と国家 どのようなかたちであるにせよ、人間が社会生活をいとなむかぎり、そこに一定の秩序が必要であることはいうまでもない。その場合、いろいろな個人的・集団的対立があるとすれば、それを調整するための、なんらかの社会的規制力が必要であることは容易に想像される。古代社会において長老の権威がみられたのもそのためであらうし、現代社会におけるさまざまな集団や機関において一種の権力関係がみられるのもそのためであらう。しかし社会全体の構造が複雑化しその矛盾が激化すれば、社会の多様な集団関係に究極的な統一をもたらし、全体社会に最終的な決定をなしうる最高の強制力が必要である。政治権力とは、この社会における最高の強制力を指すものにほかならない。したがって、政治権力はいっさいの社会現象の諸形態を規制する。ところで、政治権力そのものは抽象的な概念である。政治権力を現実、政治権力として機能せしめるものは、社会最高の権力的強制を可能にさせる権力構造にほかならない。この現実存在する権力構造が国家権力である。いいかえれば、政治権力という最高の社会的規制力を、法秩序という形態をとおして正当化し、組織化し、現実の具体的な力たらしめているのが国家権力である。国家権力は、各種の権力機構とそれを動かす人間集団、権力構造をつうじて発動され、それが現実政治を推進する主要な力となるのである。この国家権力の基盤には、いうまでもなくその成立を可能にさせるところの政治共同体、国家社会がある。政治学における国家とは、この国家社会に成立している国家権力というのである。以上のことから、国家を政治現象の基本的要素としてとらえることができる。